

心算の法  
四編  
下

^ 13  
2909  
15

3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

門へ 13  
號 2909  
卷 15

浦里 明為後正夢卷之十二



弟廿四

江戸

南仙笑林夢満人  
瀧亭鯉丈 合作

却説正在のハ其夜より危き場を折克も来  
と合せ蝶五郎に捕らるる所を思ふ誘ひ一ト  
油屋ノ立戻り多クとりつゝ始末なるハ此の  
世ノ事なり

昭和 九月 二日  
昭和三十九年九月二日

蝶五郎つちごろうは別ことろにお怒おこりとともに次の日あした船橋ふねばしの驛あきへ

早くさきて検見川けんみがわまでおまゝまじしよお怒おこら病氣びやうきあび

ひんば程ほどよりのおむづろの男おとこ持病ぢびやうの瘻氣うけきゆて秘後ひご

まのまじまじらうぶせんと逢方あひかたにくまらうら幸あきうら

一軒いっけんの酒屋さかやのありけまじまじに入いりてまじまじらうら

と休やすめらうらう 酒屋さかやの店みせに居ゐるは近頃ちかごろの男おとこ

まのまじまじらうらあんがらまよまよし入いりてまじまじらう

かうがゑあのせせ アニアニママアアのむむららのの若川わがわ神かみ

まのまじまじらうらあんがらまよまよし入いりてまじまじらう

かゝるあのせせ アニアニママアアのむむららのの若川わがわ神かみ

まのまじまじらうらあんがらまよまよし入いりてまじまじらう

まのまじまじらうらあんがらまよまよし入いりてまじまじらう

まのまじまじらうらあんがらまよまよし入いりてまじまじらう

まのまじまじらうらあんがらまよまよし入いりてまじまじらう

まのまじまじらうらあんがらまよまよし入いりてまじまじらう

おのりかゝる

二

盗人の時次郎といふ者がある。ちの方へうら  
 流のくさしうらからあ捕てもうさうさうさの  
 金の望次郎かまのきんさくさあきう急  
 度食のにや付をさきびーく言うらういやく  
 ちうく、ちやア移入曲るく。その曲度よめ  
 つひのあまを、「ハテナ、さあ〜その宝物の  
 めのぬいナ。」その宝物の名は、いんとう  
 ちうさく。待ようらう。よらう。何でも且那寺の  
 住持さぬが、そのいんとうさあき度で後髪で  
 る。後法でる。建てる。ワ、さきく。勸  
 化く。そのいんけの一神とかが、紛失してと  
 の、その盗む奴とつうさうく。世のさびの  
 言付とも、眼玉アあらうげてさえする  
 ちうさくさあらう。必ぬらう。あやらぬ。「イヤモ、合  
 意く。後分あらう。いんさあらう。氣と  
 流けてナアハ。「ッ、サ、金よと入る。度らう。往來

イノ

三



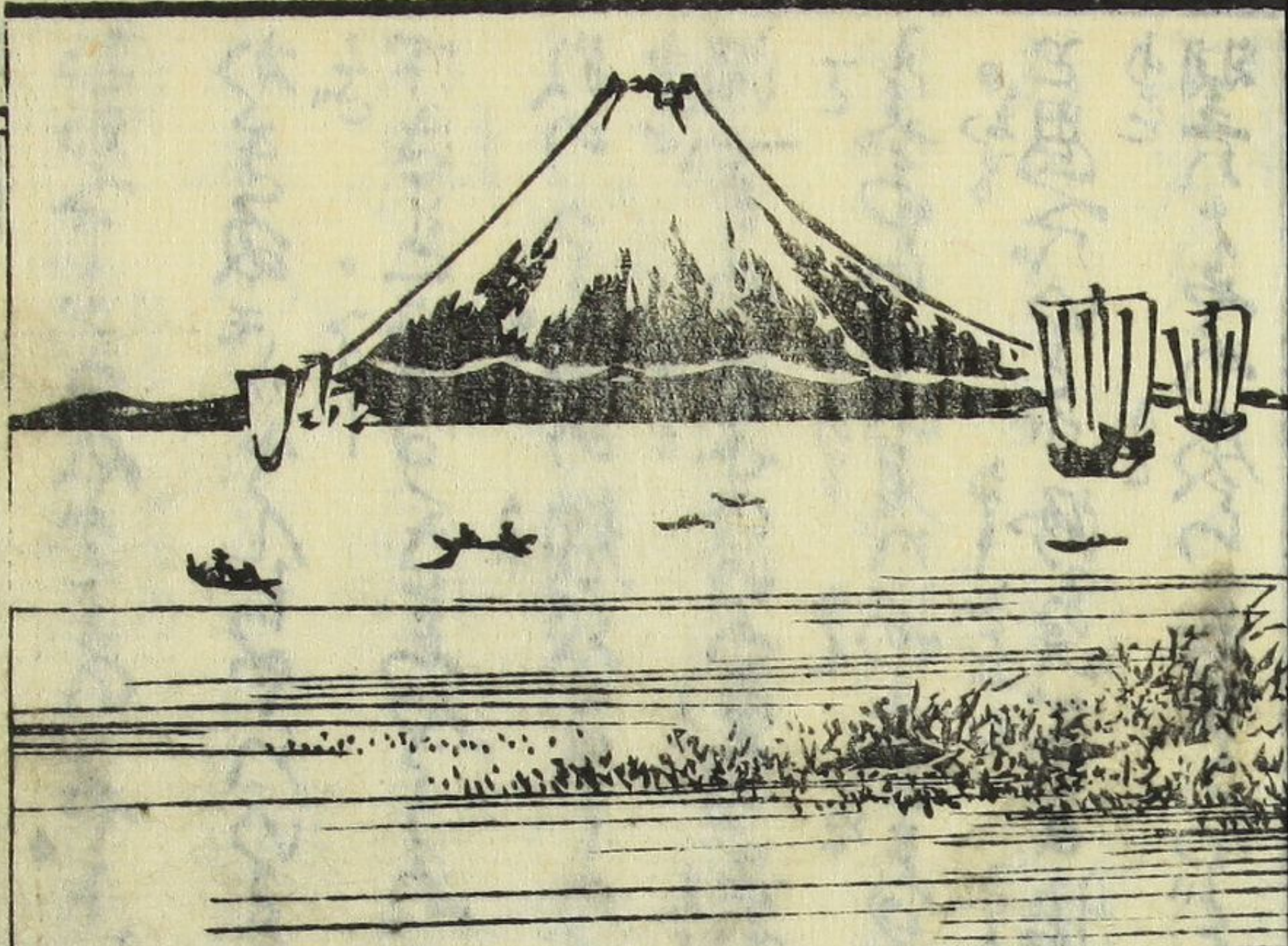
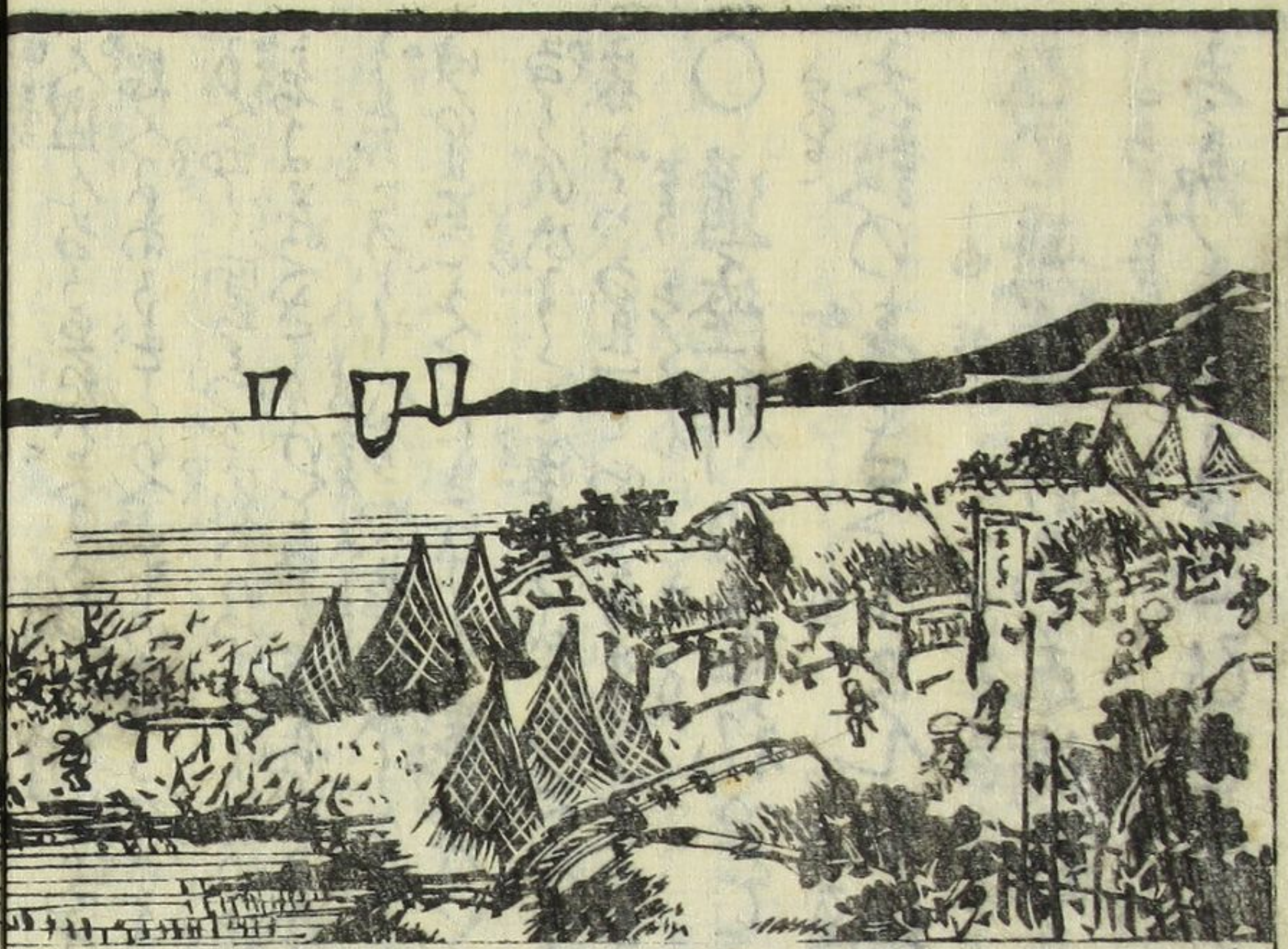
ともや逢と封お切續りきその文言よ〇何  
 るよまよのやよま百や時次郎どの夏菅家の  
 油と舟の盗賊のよ〜も〜もはまにら海さ  
 ともまよまよ〜いまよよあひまひらもけ方ら  
 ぶつてその逢まきび〜くひむら同方一は前ま  
 けよ〜とひぞん〜いひひ〜くは同道あ〜いひひ  
 もひ〜返つて時次郎どの身の〜あひ思〜ん  
 と存いもえは後やよらあ〜こよと續終〜て再び

おどろく〜正あ〜つ〜ま〜つ六今の馬生か〜の〜ご〜く  
 勢ひつよた千葉家の権柄は上総六時次郎が  
 逢まきび〜く觸るせ〜ら〜ま〜つ六あ〜つび時次  
 郎のやけ返つ〜ようろはの〜く悪者よまよ〜つけら  
 きんろ〜まよひらもまよ〜つらひる遠〜六ゆ〜時  
 次郎跡退つけて〜あひの〜中後〜しよ小ま〜し  
 取〜ら〜まよひら〜まよ〜つ〜まよ〜しよまよ  
 〜人〜ひ〜く時〜あ〜あ〜と退〜つ〜けて〜まよ〜つ〜ら

おどろく〜

一四





美智子 みちこ ミチコ ミチコ  
 コロ コロ コロ コロ

そのよまよ よまよ よまよ よまよ よまよ よまよ  
 怪我 けが けが けが けが けが

やん やん やん やん やん やん  
 内も うち うち うち うち うち

の の の の の の  
 前 まへ まへ まへ まへ まへ

あ あ あ あ あ あ  
 て て て て て て

あ あ あ あ あ あ  
 ぢ ぢ ぢ ぢ ぢ ぢ

あ あ あ あ あ あ  
 ん ん ん ん ん ん

お お お お お お  
 こ こ こ こ こ こ

あ あ あ あ あ あ  
 ら ら ら ら ら ら

あ あ あ あ あ あ  
 こ こ こ こ こ こ

あ あ あ あ あ あ  
 こ こ こ こ こ こ

あ あ あ あ あ あ  
 こ こ こ こ こ こ

あ あ あ あ あ あ  
 こ こ こ こ こ こ

あ あ あ あ あ あ  
 こ こ こ こ こ こ

あ あ あ あ あ あ  
 こ こ こ こ こ こ

おのれの

が



おののけがらふがよしのやトおののけと濁はちりて  
かきあふモウヤんちやりのさぬかぢよ早ふ爺かこで  
下はれはらひのよきやうめう爺かひよめら  
ぬのこの母の顔かまのせけべも組八拘は満ちる  
涙のやけのこのまが前表とゆうで夫入再かへぬ  
まよおらばはるしゆとまがうへは母の日陰がさらや  
と田んぼのあまのよききりしとやん  
翅六もふ戻らまやうぢよははらぬとて  
おののけ

おののけがらふがよしのやトおののけと濁はちりて  
かきあふモウヤんちやりのさぬかぢよ早ふ爺かこで  
下はれはらひのよきやうめう爺かひよめら  
ぬのこの母の顔かまのせけべも組八拘は満ちる  
涙のやけのこのまが前表とゆうで夫入再かへぬ  
まよおらばはるしゆとまがうへは母の日陰がさらや  
と田んぼのあまのよききりしとやん  
翅六もふ戻らまやうぢよははらぬとて  
おののけ

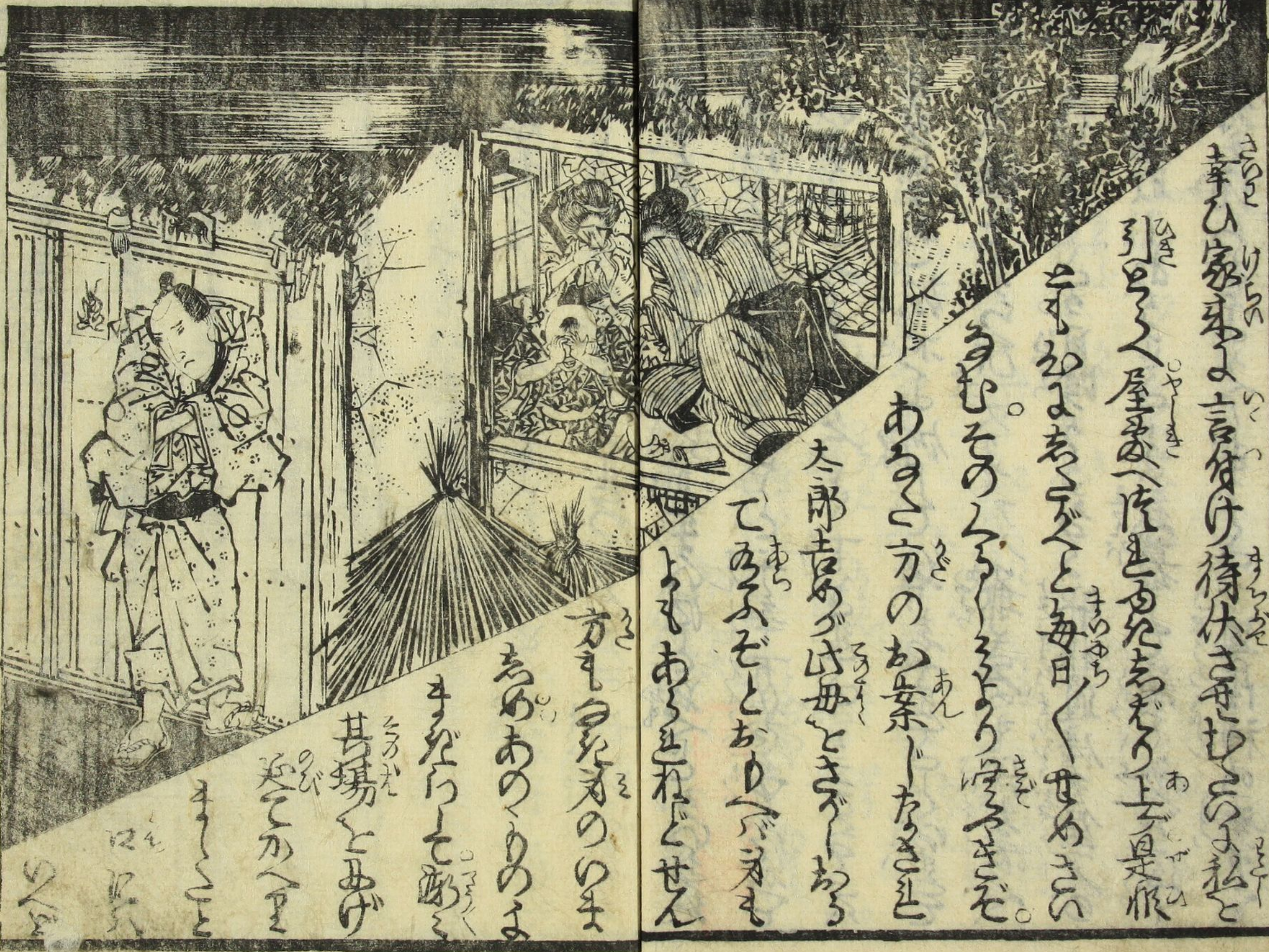


ぞよしてめやうしつるぞや道隆神の祭りの夜に  
 ちまきやとよまのりてはまきやうしが餅をか入ると  
 遅のゆゑを爺がうぐ速ひよせうとふ社堂の母  
 にて本郎吉が獨り位てめいと連て戻つく極子と  
 戻どくころの叔父あがたふとまふとたはまてしつと  
 のむらう委細のるぐころわが道正の人とあ類  
 のりそまよとよと學とも絶へてまはれしむる  
 のり糸あはせよの神隠しとせむでてるのりむぐ句

引に連てしつるしつものであらうとを父耶とのり  
 去てはつる孫とてあまきう〜海くまを教と明せよ  
 まはのり代官よりあやらせしむるあつらしてを  
 爺のりとはましてしつるしつ今よあつらぬとまはあよ  
 路は残つくははる毎日毎晩孫めはるかへてまや  
 とつたあつらむせ戻らぬとせむまふとてあつらひく  
 身よあつらひくしつるしつるあつらひくしつるあつらひく  
 若よ入るて建つ時らに思ひ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ちりちりおとすはへりてよめることきりつりつりおんが乳房と  
 うくせいで移るくしりてよめることせど乳が吐ぬて  
 あくくと泣かす類にからりたる胸すけること夢  
 思ひてせうせり獨り子の舞は男の美面を容  
 るよかきかきしんをいれおのやめのことと肩人よ  
 かる時節よしあけ子の心屋の松が業りこと  
 おのしを氏身が恨めしめまをいれむかへ昔の  
 人の壁への通つアノ一社年の大物よをいしてきよ  
 たおるるべき今のうた国へ其年のにともどろいれ  
 ぶが矛のうへをやせんうきやと十年万苦さゆにや  
 くのさよよまうまうくく下たむしこころをい  
 今月が日中ごい何よ何とやまやまてい  
 おくへ海とあらむスリヤアノ爺さぬも代を人  
 連てけましる目頃うらるる邪非道傍に無人の  
 軍者次ぬあうことよを慕して兼くあては  
 かど射も切らぎようましる道陰神の祭りと





幸ひ家来よ一言付け待伏させむのよ私と

引とく屋敷へ戻るとおたけおどるよ是れ

おどるよおどると毎日くせめさる

おむそのくさくさよりおどるよ

あつこの方のお茶どちかきこと

太郎吉あがは母とさぐりあつ

てあふぞとちりおどるよ

よもあつおどるとせえ

方もおたけののよ

あつあつののよ

おどるよとあつ

おどるよとあつ

おどるよとあつ

おどるよとあつ

おどるよとあつ

おどるよとあつ

おたけの御成金

二

おのれが今も退人のうらみ必きまじりても存

命をそぬは身とあらぬ稚児がおのれがコノふかきぬ

爺あがらや一かどぬよは嫁さぬや祖父さぬも

どくから行ききりてどくあやういでんむがとて

るぬゆゑもまふも行くてんむさうた。のぬ是

からハヤもちやもすむてあまのすまうよ成や各々

ま悪あづなもせぬやよ。たまひとくかやちぬと

連てのうてトてしとせしつゆら母親ふまら

まびるも入兼せぬら後たうてあぶら

お組が顔ぎのぞた。母さぬ何と泣きやのま

かんちらうの回よあなうらうてあま入がう

かまうてても獨りおびとまらむよ。ま泣きあ

こまやあやうとあやうす武者人形とあやう

梅子にまらうと落る首ハツとたうやふお組が

ろたさてハあま鎌倉にてのや獄屋よつらう

首よるやとあま返るやあま。あま神のけあ

おのれが...

...



備よるさーのぞく一冊のまゝに世の縁をよるま  
 お組が類と教「ヤ」ちのいへる女房とらふよ  
 目早くさききか「ヤ」らへるあつとさあまのせん  
 かいふまの内へか「ヤ」喜高一舞の早のあま  
 世のいへるさきか女房母人始終のいへるあま  
 から外に「ヤ」いへるいへるいへるいへるいへるいへる  
 中へ師の月俵人さきか「ヤ」いへるいへるいへるいへる  
 とあまのいへるいへるいへるいへるいへるいへる

子兼家のいへるいへるいへるいへるいへるいへる  
 齒かゝるいへるいへるいへるいへるいへるいへる  
 へ社系の及密の隠して待ま「ヤ」あへるいへるいへる  
 よりのあま「ヤ」いへるいへるいへるいへるいへるいへる  
 は扱ふまの舞の舞の舞の舞の舞の舞の舞の舞の舞の舞  
 年頃松戸めいへるいへるいへるいへるいへるいへる  
 をらふいへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる

おのゝとらふ

十一



命と捨つこと誰あつてそ後<sup>そのあつて</sup>の徳<sup>とく</sup>せんとしる者<sup>もの</sup>な  
 けま<sup>ま</sup>ば<sup>ば</sup>産<sup>う</sup>神<sup>かみ</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>祈<sup>いの</sup>念<sup>ねん</sup>と<sup>と</sup>圍<sup>ま</sup>取<sup>と</sup>は<sup>は</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>  
 當<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>一<sup>ひ</sup>人<sup>ひと</sup>は<sup>は</sup>正<sup>ただ</sup>ち<sup>ち</sup>事<sup>こと</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>か<sup>か</sup>ん<sup>ん</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>亡<sup>な</sup>し<sup>し</sup>令<sup>し</sup>令<sup>し</sup>我<sup>われ</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>  
 捨<sup>す</sup>て<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>年<sup>とし</sup>事<sup>こと</sup>の<sup>の</sup>仇<sup>あだ</sup>と<sup>と</sup>亡<sup>な</sup>し<sup>し</sup>後<sup>のち</sup>の<sup>のち</sup>徳<sup>とく</sup>と<sup>と</sup>  
 の<sup>の</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>極<sup>ごく</sup>は<sup>は</sup>極<sup>ごく</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>必<sup>かならず</sup>に<sup>に</sup>残<sup>のこ</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>母<sup>はは</sup>や<sup>や</sup>子<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>  
 せ<sup>せ</sup>あ<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>村<sup>むら</sup>人<sup>ひと</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>約<sup>やく</sup>束<sup>そく</sup>と<sup>と</sup>密<sup>ひそ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>  
 返<sup>かへ</sup>り<sup>り</sup>我<sup>われ</sup>家<sup>いえ</sup>の<sup>の</sup>門<sup>かど</sup>と<sup>と</sup>よ<sup>よ</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>彼<sup>か</sup>れ<sup>れ</sup>が<sup>が</sup>親<sup>おや</sup>父<sup>ちち</sup>と<sup>と</sup>代<sup>しろ</sup>官<sup>くわん</sup>所<sup>じょ</sup>と<sup>と</sup>  
 り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>行<sup>ゆ</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>永<sup>とこ</sup>徳<sup>とく</sup>倉<sup>くら</sup>へ<sup>へ</sup>出<sup>で</sup>祈<sup>いの</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>徳<sup>とく</sup>を<sup>を</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>斗<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>

ろ<sup>ろ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>け<sup>け</sup>恨<sup>にくしみ</sup>重<sup>おも</sup>く<sup>く</sup>軍<sup>いくさ</sup>を<sup>を</sup>次<sup>つぎ</sup>今<sup>いま</sup>の<sup>の</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>き<sup>き</sup>ん<sup>ん</sup>  
 拳<sup>こぶし</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>だ<sup>だ</sup>の<sup>の</sup>齒<sup>は</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>ひ<sup>ひ</sup>き<sup>き</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>一<sup>ひと</sup>滴<sup>しず</sup>は<sup>は</sup>む<sup>む</sup>か<sup>か</sup>ん<sup>ん</sup>人<sup>ひと</sup>は<sup>は</sup>び<sup>び</sup>  
 お<sup>お</sup>組<sup>ぐみ</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>「<sup>こゝろ</sup>の<sup>の</sup>学<sup>まな</sup>び<sup>び</sup>の<sup>の</sup>理<sup>こと</sup>が  
 と<sup>と</sup>今<sup>いま</sup>と<sup>と</sup>捨<sup>す</sup>て<sup>て</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>世<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>が<sup>が</sup>  
 師<sup>あし</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こゝろ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>へ<sup>へ</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 最<sup>さい</sup>終<sup>しゆう</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>さ</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 善<sup>ぜん</sup>に<sup>に</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 徳<sup>とく</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>



只事とあひひは殺し上鎌倉を去り行きたんせいに  
 鎌倉に女房をたてて今更によくおぼしめし  
 志したる一とあづけらば半せうこそおぼしめし  
 眞主との面白くけりしうなむおぼしめし  
 もと一もあひひは殺し上鎌倉を去り行きたんせいに  
 鎌倉に女房をたてて今更によくおぼしめし  
 志したる一とあづけらば半せうこそおぼしめし  
 眞主との面白くけりしうなむおぼしめし

同くしつらむとす。その中へまゝなりと伏し  
 後せんしつらむとす。若母の始終さうりむ  
 涙よむすしつらむとす。侍りし刀をさすりし  
 のんごくしつらむとす。実なるまは夫婦ありて  
 妻コバ何ゆえに母を害し。そのまは母を  
 何ゆえに母を害し。そのまは母を  
 何ゆえに母を害し。そのまは母を  
 何ゆえに母を害し。そのまは母を

おのむすび

十七

あまに母のむねのむねにぞ存命時と待たせしむ  
よもかきいづかへ再父家と却てしむしれりしを  
るん本良きむとむねや祖母とさぶさぶとあつと思へん  
美泉のたつとさう〜あなまゝさうぬ老の身も捨らん  
惜しむ念るむとさう〜孫や孫切な嫁女の身の上  
正太郎。三人四人の會をむと捨らひの生家とむす  
あなまゝの昔けの早よさうのあなまゝの母と婦人左  
右よさうのむねのむねのむねのむねのむねのむねのむね

美女氣のあなまゝの身とむねのむねのむねのむねのむね  
あなまゝのむねのむねのむねのむねのむねのむねのむね  
窺ふ悪者あなまゝとひそめて耳の口〜ここに同空や  
あなまゝ〜さうの正太郎兼てお代官。松戸とさうの  
言付らむしむとむね〜二人大方道目のまゝに宛へ  
うせあらまゝあらむとむね〜とむね〜とむね〜とむね〜  
あなまゝのあなまゝ〜あなまゝのあなまゝ〜あなまゝのあなまゝ  
居〜あなまゝの野良め今夜あら〜六其の虫と飛んで火よ今



竹の影に  
月影を  
照らす

あのかしら

正太郎 同大 七まづバサあぬがさ通のヤノのうまを

引くまをまじまじよ女房めもさの間にやらぬ

かろて二人で這類うかろあのもつ筋よく上

松戸さぬ入つて行バるうびの金六を流すうま

うまのころうまびし叫き稽も口口で覗同六前よ

少年まわき路より合意と佐伊が宅入らん

まろ後現ゆ一人の侍後面路市は類く一忽

二人が襟髪とむつとつらめバ作天くふとらあ受

法にもに左大へ投選け懐申より取總中へ

くま相もと刀で杖より笛を吹かたき

本落とむ組子の人々悪漢二人と

音小登りて何のやらんと西大郎が宅より

紙燭の燈さると吹来るお嵐は消て

馬の園小まがたて侍八忽人む隠

侍八のうらむにぞむ五編目と積得て知

禁満人伏して中上ます當明鳥の矢はむあま

且版元の望は但世に編敷くさうの以退屈おこさ

りゆふはは五編目八物志緒と侍の首尾全本十五巻

相成の志五編目大尾三冊八来甲申正月二日相違

おねいしのおらるるぎに採判よりき採備と書預上

浦里  
時節

明為後正夢巻之十二才

# 秘 方 志 願 丸 九 功 能 書

小半劑入 代百二十四銅

身一かどののろまきまみむくみんはまのまらふし  
いつぎれしてはるまがくむねまらう風とうまらまら  
ののど氣ぶせうやく秘るる浅まのむし  
かしてせうせいせいらいせいせいせいだるまら  
惣身血のちがりはくはあまらかかれうすくせう  
たらしりむねつらえむねいせいせいおかありあ  
まらまらまらまらまらかくむねやけおびのつら  
月あまらまらあて或はは月又三三事も後採  
るる大へんむねいせいせいせいせいせいせいせい  
さんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさん  
男男女女小同今かきては下て散のりありあ  
氣を寄るうして何痛ともこの散は  
ははははははははははははははははははははは

此は... 江戸... 横山町... 大坂屋平藏

本家 江戸兩國横山町二百大坂屋平藏

取 高崎... 江戸... 大坂屋平藏

尼子九牛七國士傳 近刻

為永春水著 國英 篆西画

歌舞 妓織

系如志

二編 近刻

業亭行成作 貞齋泉晁画

滑稽和合人

二編 近刻

滝亭鯉文作

和漢軍書... 費... 江戸...

書林

江戸小傳馬町三丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛



